

米は天からのおくり物

川西小学校四年 加倉田 真央

朝早く起きて、母といっしょにさん歩をした。朝の空気は、ひんやりしていて、まだ目が覚めきっていないわたし頭の、風の中を風のようにすうっと通っていた。その風で一気に目が覚めた。

少し歩いていくと、あたり一面にたんぼが広がっていた。朝一番の太陽がたんぼを照らし、緑一色のいねの葉がもつとあざやかな緑色に変わっていた。その光けいがかさうに、わたしの心をすがすがしくさせた。すると、緑色にかがやいたたんぼに、人がげが見えた。

わたしは、どきっとして思わず母の手をにぎった。よくよく見てみると、一人のおじいさんがいねの葉をていねいにかき分け、のぞいていた。わたしと母は、「おはようございます」。

と、あいさつをした。その言葉にふり向き、ここにこしたおじいさんが、



「はい、おはよう。朝のさん歩かい。」

と、やさしく声をかけてきた。わたしは、

「何をしているんですか。」

と、たずねてみた。するとおじいさんは、

「毎朝、米の育ちぐあいを見にきてるんだよ。

と、応えてくれた。つづけておじいさんは、

おいしい米が出来るまでの様子や米作りに対

する思いや苦労などを、まるで社会の教科書

から農家の人々が飛び出して来たかのように、

生の声で分かりやすく教えてくれた。おじい

さんの米作りに対するじょう熱がわたしの心

にびんびんひびいてきた。

さいごにおじいさんは、

「お姉ちゃん、ごはんは好きかい。」

と、聞いてきた。わたしは、まよわず大きな

声で、

「大好きです。」

と、応えた。それを聞いたおじいさんの顔は

最高の笑顔になり、とてもうれしそうだった。

それから家に帰り、さっそく朝ごはんのい



ゅんびをした。すいはんきの中をのぞいてみ  
ると真っ白いごはんがほう石のようにキラキ  
ラとかがやいていた。わたしは、いつもより  
多めに茶わんによそった。茶わんから白い湯  
気と共にごはんのあまい香りがしてきた。一  
口入れたしゅん間にそのあまさがさらにまし  
口の中いっぱいに広がった。

今朝のごはんは特別おいしく、幸せな気持  
ちにさせてくれた。と同時に、おいしいさんの  
顔が頭の中にうかんできた。そしておいしいさ

んが話してくれた一言一言を思い出しながら  
一つぶ一つぶのごはんをかみしめて食べた。

パンぎらいなわたしにとてごはんは、  
命をつなぐ大切な物である。その米も、ここ  
数年つづいている。天こう不良で悪いえいき  
ょうを受けているそうだ。おいしいさんも、  
米の最大のてきは、天こうだ。自然が相手で  
は何も出来ない。と、くやしそうに言っ  
てい。だから、米は天からのおくり物だと思っ  
て、感し<sup>ち</sup>しなから、食べていきたい。